

実践的コミュニケーション能力の育成

— 対話活動の充実を通して —

大兼敦子 星野百合子 川島聡史

日々加速的に進行する世界のグローバル化の中で、日本人の英語運用能力の向上が叫ばれている。そのような背景の下、平成15年3月に文部科学省から「英語が使える日本人」育成のための行動計画が発表され、学校教育における英語指導の目指すべき方向性が示された。

それによれば、中学校卒業段階における日本人の英語力として、「挨拶や応対、身近な暮らしに関わる話題などについて、平易なコミュニケーションができる」ことが目標として設定され、英語の授業における指導方針としては、以下のことが述べられている。

「英語が使える」ようになるためには、文法や語彙などについての知識を持っているというだけではなく、実際にコミュニケーションを目的として英語を運用する能力が必要である。このため、英語の授業においては、文法訳読中心の指導や教員の一方的な授業ではなく、英語をコミュニケーションの手段として使用する活動を積み重ね、これを通して、語彙や文法などの習熟を図り、「聞く」「話す」「読む」「書く」のコミュニケーション能力の育成を図っていく指導の工夫が必要である。

本校外国語科（英語）では、平成14・15・16年度の3年間、学校全体の研究主題である「確かな学力を身に付けさせる学習指導の在り方」を受けて、「実践的コミュニケーション能力の育成 —『学ぶ楽しさ』を実感できる授業の実践—」をテーマとして研究を行ってきた。その後も、いくつかの手だてを講じながら、同じ主題で研究を進めている。

1 研究テーマ設定の趣旨

1 これまでの研究から

(1) 前年度までの研究の概要

本校外国語科（英語）では、「確かな学力」を「実践的コミュニケーション能力」ととらえ、その概念を4領域とのかかわり、資質・能力とのかかわり、基礎・基本とのかかわり、及び自ら学び自ら考える力とのかかわりから、次のように定義した。

実践的コミュニケーション能力

- ① 「言語の使用場面や言語の働き」と結びついた「話す」表現能力
- ② 「情報や相手の意向」「自分の考え」を伝え合う能力
- ③ 基礎・基本を自分なりに活用し、コミュニケーションを図ろうとする態度

また、「確かな学力」につながる「学ぶ楽しさ」を、「様々な学習活動における成就感」ととらえた。よって下のいずれか、あるいはすべてが満たされていれば、生徒は学ぶこと

とを「楽しい」と感じるであろうとの仮説を立てて研究を進めた。

- ① 学ぶべきことがわかったと実感できる。
- ② 英語を使い、自分の考えなどを伝え理解してもらえたと実感できる。
- ③ 英語を使い、相手の意向などを理解できたと実感できる。
- ④ 対話において、適切に応じ、問答をし、意見を述べ合ったと実感できる。

そこで、様々な学習活動において「学ぶ楽しさ」を実感できるような授業改善の手だてとして、次の3つを考え実践してきた。

手だて① 授業の学習目標が明確に分かるようにする。

手だて② 学習過程と学習結果において、自分がどの程度目標を達成しているかが明確に分かるようにする。

手だて③ 英語でコミュニケーションが図れたという実感ができる機会を与える。

(2) 研究の成果と課題

上記の3つの手だてを講じて授業を行ったことにより、生徒たちの英語における確かな学力がどのように高まったかを検証するために、前述した実践的コミュニケーション能力に関する自己評価表を作成し、全校生徒461名に調査を行った。以下はその自己評価表の項目である。

1. 場面に応じて、イントネーションや表情を工夫しながら話すことができるようになった。
2. 相手に応じて、適切な表現を用いて話すことができるようになった。
3. 場面に合った表現を使って話すことができるようになった。
4. 自分の気持ちや考えを相手に伝えられるようになった。
5. 相手が伝える情報や考えを理解できるようになった。
6. 自分の話をより知ってもらえるよう、より多くの情報を加えて伝えることができるようになった。
7. 相手のことをより知るために、質問することができるようになった。
8. 自己表現に必要な語彙が増えた。
9. 相手に自分の伝えたいことを進んで話そうとした。
10. 相手に理解してもらうためにジェスチャーやアイコンタクトを心がけた。
11. 間違いを恐れず話そうとした。
12. 相手の話していることが分からない、聞き取れないときに、質問したり、聞き返したりしようとした。
13. 相手の話すことに対して、あいづちを打ったり、適切な反応を示そうとした。

研究の成果として、全学年ともすべての項目において「4：とてもそう思う」「3：ややそう思う」と肯定的な回答をした生徒が、8割前後にのぼったことが挙げられる。特に約9割の生徒が達成できたと評価したものは、「Q8：自己表現に必要な語彙が増えた」「Q5：相手が伝える情報や考えを理解できるようになった」の2つである。この背景には、授業の中でコミュニケーション活動を多く取り入れた結果、生徒が英語を使うことに慣れたこと、および自己表現をする際に役に立つ語彙や表現を生徒の活動の中から取り上げ、クラス全体で共有し合う授業体制が、本校生徒全体の語彙力・表現力の向上に有効に働いたことがあると考えられる。

一方、課題として見えてきたものは、他の項目と比べ評価が低かった「Q7：相手のことをより知るために質問できるようになった」「Q10：相手に理解してもらうためにジェスチャーやアイコンタクトを心がけた」「Q12：相手の話していることが分からない、聞き取れないときに、質問したり、聞き返したりしようとした」「Q13：相手の話すことに対して、あいづちを打ったり、適切な反応を示そうとしたりした」などであった。

この自己評価の結果から、多くの生徒が以前にくらべて「英語でコミュニケーションを図れるようになった」という実感をもっているようである。しかしながら、評価の低かった項目を分析してみると、「自分が言いたいことを伝えることができるようになった」という一方通行の意思の伝達であったり、「相手が伝える情報や考えを理解できるようになった」というのも、英語を聞き取る力が高まったという意味での理解にとどまっていた回答であるように思われる。話し手の考えや意向を正確に理解しようとする態度やその方略、質問をしてさらに情報を得て互いに会話を発展させようとする力は十分についているとはいいがたく、コミュニケーション本来の姿である双方向の意思伝達はなされていない様子がうかがえる。

2 生徒の実態から

前年度行われた英語における確かな学力に関する自己評価の結果を受け、さらに「コミュニケーション」という概念に焦点を当て生徒の意識調査を行った。対象生徒は平成16年度全生徒455名、実施時期は2月下旬である。生徒の注目すべき回答とその考察は以下の通りである。(詳細は別添資料参照)

1 英語でコミュニケーションをするにあたって大切だと思うこと

この質問に対しては、ほとんどの生徒が「相手の目を見て話す」「相手に伝わるように話す」など、自分の意思を伝達する際に重要であると思われる項目を挙げている。これは日頃から授業中に行っているコミュニケーション活動の中で、アイコンタクトの重要性を指導してきたともに、生徒たち自身がそのことを強く感じているからであろう。

ここで注目すべき点は、少数ではあるが、「相手の話すことをしっかり聞く」ということを、「内容を伝えること」よりも上位に挙げた生徒がいることである。これらの生徒に共通して言えることは、英語圏でのホームステイ経験があったり、自ら進んで英会話のテレビをみたりラジオを聞いたりしていることである。学校での授業以外でも積極的に英語に触れることにより、英語を聞く力の重要性を認識しているだけでなく、英語によるコミュニケーションのモデルを自ずと感得しているのではないかと考える。

2 コミュニケーション能力を高めるために重要だと思う学習活動について

この項目においては、「Q7,Q8：ペアやグループでお互いの気持ちや考えを伝え合うこと」を最も重要だと考えている生徒が多いことがわかった。生徒にとって身近な「コミュニケーション」とは、やはり「話すこと」が中心であり、それによって自分自身のことをうまく伝えられるようになってこそ、実践的コミュニケーション能力がついたと考えるのであろう。

一方、あまり重要でないと考えられている活動は、「Q9：ペアやグループで話し合ったことを発表すること」「Q11：話し合ったことをワークシートにまとめること」であった。これらについては、話し合った内容に価値を見出せず、発表したりまとめたりすることに意味を感じない生徒が多いのであろう。教師側が、話し合った後の学習活動を重要視してこなかった結果だと思われ、指導過程の見直しが必要である。

英語のコミュニケーションに関するアンケート

3 - () No.() 氏名 ()

1 英語でコミュニケーションをするにあたって、大切なことはどんなことかを自由に書いてください。

・
・
・
・
・

2 あなたが授業中に行う英語でのコミュニケーションの能力を高めるために、以下の活動はどれくらい重要だと思うかを、次の3つに分類してみてください。

ア とても重要だと思う イ 重要だと思う ウ あまり重要だとは思わない

- | | |
|---|-----|
| ① 新出単語を練習すること。 | () |
| ② 教科書を何度も繰り返して音読すること。 | () |
| ③ 教科書の内容などについて、絵を見ながら先生の話す英語を聞いて理解すること。 | () |
| ④ 教科書の内容などについて、英語での質問に答えること。 | () |
| ⑤ 先生のあとについて、基本文を繰り返して言うこと。 | () |
| ⑥ ペアで基本文の練習を繰り返してすること。 | () |
| ⑦ ペアで自分なりの英文を使って、気持ちや考えを伝え合うこと。 | () |
| ⑧ グループでお互いの気持ちや考えを英語で伝え合うこと。 | () |
| ⑨ ペアやグループで話し合ったことを、発表すること。 | () |
| ⑩ 友人の発表を聞いて、他の人の考えを聞くこと。 | () |
| ⑪ 話し合ったことを書いて、ワークシートにまとめること。 | () |
| ⑫ 自分がまとめた英文を、先生や友人に見てもらうこと。 | () |

3 あなたが英語でのコミュニケーションをするにあたって、それぞれの項目を自分はどのくらい達成できていると思いますか。次の4つの段階で評価してみてください。

4 とてもよくできると思う	3 よくできると思う
2 あまりよくできないと思う	1 よくできないと思う

- | | |
|-----------------------------------|-----|
| ① 基本文を使って、自分の意見や考えを相手に伝えること。 | () |
| ② 基本文に加えて、自分の意見や考えを相手に伝えること。 | () |
| ③ 相手の意見や考えを聞いて、理解すること。 | () |
| ④ 相手の意見や考えに対して、適切に反応すること。 | () |
| ⑤ 相手の意見や考えに対して、自分から質問をすること。 | () |
| ⑥ 相手の意見や考えに対して、自分の意見や考えを述べること。 | () |
| ⑦ つなぎ言葉やジュスチャーなどを使って、対話を続けようとする事。 | () |
| ⑧ 分からない語や表現を、知っている他の語や表現で言い換えること。 | () |
| ⑨ 英文を読んで、それに対する自分の考えをもつこと。 | () |
| ⑩ 読む人のことを意識して、英文を書くこと。 | () |

3 コミュニケーションに関する技能の達成度について

この項目については、「Q3：相手の意見や考えを聞いて理解すること」に肯定的な回答をした生徒が80%にのぼった。「Q1：基本文を使って自分の意見や考えを相手に伝えること」に対しては79%の生徒が、また「Q2：基本文に加えて」の質問に対しても、61%の生徒が同様の回答をしている。このことは、本校外国語科（英語）が以前から継続して行ってきた自己表現を中心とした言語活動およびプラス1の指導の成果であると考えられる。

しかし、「Q5：相手の意見や考えに対して自分から質問すること」や「Q6：相手の意見や考えに対して自分の意見や考えを述べること」といった項目に対しては、「とてもよくできる」と答えた生徒はそれぞれ11%、13%であり、その割合が低かった。これらの活動においては語彙力や即時的な反応が多分に求められるものであり、生徒たちが難しいと感じるのも当然であろう。しかしながら、授業における生徒の様子を観察すると、相手の発話内容をただ表面的な情報として受け取っており、相手の意向などを感じ取ったり、会話を発展させようとする姿勢は見受けられないこともまた事実である。

以上の考察から、本校生徒の実態として、英語におけるコミュニケーション能力のうち「伝達する力」の部分にはある程度の自信をもっているものの、「相手の意向を受容する力」や「相手の意見や考えに対して、適切な反応をする力」「双方向のコミュニケーションによって会話を発展させていこうとする力」は不十分であることが明らかになった。実際、我々の指導をふり返ってみても、生徒にいかに自分のことを表現させるかという自己表現力の育成に主眼があり、発話の受け手を意識した指導にはあまり力点を置いてこなかったように思われる。ここで、言語を通したコミュニケーションのあり方を再考するとともに、授業における対話活動の見直しおよび改善を図るため、研究のテーマを、「実践的コミュニケーション能力の育成ー対話活動の充実を通してー」と設定した。

2 研究計画

(1) 第1年次（平成17年度）

- ア 英語でのコミュニケーションにおける「対話力」の定義づけ
- イ 「対話力」の身に付いた生徒像の検討
- ウ 対話活動を充実させるための手だての検討
- エ 授業実践

(2) 第2年次（平成18年度）

- ア 英語でのコミュニケーションにおける「対話力」の定義の修正・改善
- イ 「対話力」の身に付いた生徒像の修正・改善
- ウ 授業改善のための手だての修正・改善
- エ 授業実践
- オ 研究の評価方法についての検討

(3) 第3年次（平成19年度）

- ア 研究のまとめ及び評価
- イ 新研究の内容の検討

3 研究内容

1 英語でのコミュニケーションにおける「対話力」とは

今回の研究に取り組むにあたって、本校外国語科（英語）では、まず吉田研作氏（上智大教授）と八嶋智子氏（関西大教授）の提言から、「対話力」の定義について考えた。

吉田研作氏は、Nunan(1991)が述べているコミュニケーションな英語の授業の5つの要素に関する考察のもと、「オーラル・コミュニケーション」と「会話」の違いを次のように述べている。

「会話」とは、少なくとも2人の対話者が互いに相手が言ったことを理解しながらやりとりすることである。そして、その際に必要なのは、相手が言ったことを理解するためのリスニング力と自分の考えを相手に伝えるためのスピーキング力だろう。しかし、「オーラル・コミュニケーション」の場合には、もうひとつ忘れてはならない大切な能力がある。それは、互いの考えを「調整し合い」、（たとえ100%ではなくても）共通の認識を得るための「対話能力」である。

また、八嶋智子氏は、コミュニケーションを考えるための三つのキーワードとして、「他者」「意味の共有」「相互作用」をあげている。

第一に、コミュニケーションは「他者に対して存在すること」であり、つまり他者を意識したときに生じる人間の認知・行動・情動の変化が深く関わるものである。第二に、コミュニケーションを「意味の共有」「共通の意味を構築すること」と考え、コミュニケーションを図っていく中で、意味の交渉や調整をしながら共通の意味を構築していくのである。第三の「相互作用」とは、相手がどのように反応するか予測しながら、相手の反応に合わせて、自分の反応を変えることである。

これらの提言およびこれまでの研究の反省から、本校外国語科（英語）では、中学校の英語の授業におけるコミュニケーションには、自分の考えを相手に伝えるための「自己表現力」と、相手の考えや意向を受容するための「対話力」が重要な要素であるととらえ、今回の研究において生徒に身に付けさせたい「対話力」を以下のように定義した。

「対話力」

＝相手の気持ちや考えを正しく理解した上で、自分の気持ちや考えを伝え、両者が協力して会話を継続し発展させていく力

2 対話力のついた生徒の理想像

「対話力」の定義を受け、「対話力」のついた生徒の理想像を以下のように設定した。

ア 相手の気持ちや考えを受けて、自分から質問することができる。

イ 相手の気持ちや考えを受けて、自分の意見や考えを述べることができる。

ウ 互いに気持ちや考えを伝え合うことにより、共通の認識を得ることができる。

エ 対話をすることの意義を感じ、継続し発展させることができる。

対話が行われる場面においては、必ず「話し手」と「聞き手」が存在する。この両者の間に対人的な意味と相互作用があって初めて対話が成立することは言うまでもない。これまでの本校外国語科（英語）の研究においては、前述の通り、言語を通したメッセージが意図した通り伝達されたかに主眼があり、対人関係的な側面や相互作用の動的な側面には

あまり踏み込んでいなかったように思われる。この「対人関係」および「相互作用」を授業における言語活動に当てはめて考えると、まず生徒に「相手の考えや気持ち」を意識させることが重要であろう。「相手の気持ちや考えを受けて」とは、相手の発話内容をしっかりと聞くとともに、表面的な情報だけではなく、話者の考えや気持ち、意向を受容することである。その上で適切な質問をしたり、内容を確認めたりするなどして、理解しようとすることを示している。「共通の認識を得る」とは、対話する中から今まで知りえなかった相手の考えや気持ちを知り、それをお互いの合意形成に生かすことである。

ア～エは、話題や生徒の学習段階によって、内容の深まりや意義の感じ方に多少の差はあるとは思われるが、どのような対話においても必要とされるものだと考える。

3 対話力育成のための学年目標

「中学校学習指導要領（平成10年12月）外国語編」では、生徒の学習段階を考慮して各学年の指導にあたって配慮事項が記述されている。それを参考に、「対話力」を育成するための学年目標を上記の理想像との関連から、次のように設定した。

	第1学年	第2学年	第3学年
	アイコンタクトを心がけ、相手の気持ちや考えを積極的に理解しようとしたり、自分の気持ちや考えを正しく伝えようとしたりする。		
ア	相手の発話に対し、あいづちをうったり、確認するためにその内容を繰り返したりする等、場面と内容に応じた適切な反応をすることができる。	相手の発話内容の意図を正しく理解し、場面と内容に応じた適切な反応を示すことができる。また、相手の発話内容を受けて、適切な質問をすることができる。	相手の発話内容の意図を正しく理解することができる。また、相手の発話内容を受けて、新たな情報を引き出すための複数の質問をすることができる。
イ	相手の気持ちや考えを理解した上で、簡単な表現を用いて、それに対する自分の気持ちや考えを伝えることができる。	相手の意向を理解し、それに対する自分なりの気持ちや考えを伝え、両者で協力して対話を発展させることができる。	相手の意向を理解し、それに対する自分の気持ちや考えを伝え、両者で協力して対話を発展させることができる。
ウ エ	お互いの気持ちや考えを伝え合う中から共通の認識を見出し、対話することの意義を感じることができる。		

対話力の身についた生徒

【生徒に期待する対話例】

※ 下線部は今回の研究において特に重視したい表現を示す。

第1学年

A: Hi, Yuriko.

B: Hi, Satoshi.

A: Do you like shopping?

B : Yes, I do. I like shopping.
A : Oh, you like shopping. Then, let's go shopping.
B : OK.

第2学年

A : Satoshi, what are you going to do this weekend ?
B : Nothing special. Why?
A : I'm going to go shopping. Shall we go together?
B : OK. I like shopping too. When shall we meet?
A : How about Saturday ?
B : OK. Saturday is fine with me.

第3学年

A : Satoshi, what are you going to do this weekend ?
B : Nothing special. Why?
A : I want to buy a present for my mother.
B : You mean a birthday present ?
A : That's right. Her birthday is June 27th.
B : OK. What will you buy?
A : Well... I think I'll buy a hat for summer.
B : That's a good idea. There are many hats in TOBU.
Shall we go there?
A : OK. Thanks.

4 対話活動を充実させるための手だて

生徒に「対話力」を身に付けさせるためには、授業における対話活動およびそれに至るまでの指導について再考し、どのような手だてを講じればよいのかを検討しなければならない。本校外国語科（英語）では、今回の研究における対話活動を充実させるための手だてとして、以下の三つを考えた。

(1) 対話を発展させる力の育成

ア フィードバック表現の指導

相手の発話内容に関して反応を示しフィードバックするということは、相手が話す内容をしっかりと受け止めることであり、また聞き手自身の理解を深めるにもつながる。また、フィードバックされることで話し手は、聞き手の理解度を把握した上で安心して話すことができることは言うまでもない。中学校において指導すべきフィードバック表現には以下のようなものが考えられる。生徒の学習段階を考慮しながら、必要に応じて対話活動の中に取り入れ訓練をするとともに、日常の授業における教師との対話、生徒同志の対話においてもこれらの表現を用いられるよう心がけたい。

- ・あいづちをうつ（ I see. / Uh huh. / Oh, really ? / Oh, do you ? ）,
- ・自分の考えや気持ちを伝える（ Me too. / I think so too. / I agree, but ～.など）
- ・感想を述べる（ Good. / That's great ! / How wonderful ! / ）

- ・相手が言ったことを繰り返して確認する（Oh, you like Giants ! / Did you say ~ ?）
- ・相手が言った内容を解釈して返し、理解を深める（you mean ~ ? / ~, right ? ）

イ 質問力の育成

対話を継続し発展させるためには、相手の発話内容を聞きその背景にある意向を理解するとともに、発話内容に不足している情報とは何かを考え、自分から相手に質問をする力が必要となってくる。

そのため、言語活動に入る前段階において、多様な形式の質問の練習を生徒にさせることによって、相手から情報を引き出したり、共通の認識を得るための質問する力を育成できるのではないかと考えた。

(2) 学習形態の工夫

相手の考えや意向などを受容した上で、コミュニケーションを継続させていく力を育成するためには、生徒が既習事項を含めた内容を用いて英語を発話する活動が必要である。学習指導要領においては、指導計画の作成と内容の取り扱いの部分において、「ク.学習形態などを工夫し、ペアワーク、グループワークなどを適宜取り入れること」とあるように、活動の形態の工夫が必要である。本校外国語科（英語）においては、授業において日常的にペアワークを多く取り入れているが、日常生活における場面においては、三人以上で話をする場面も多い。そこで、グループワークを行わせる機会を増やし、二人以上の人数において、自分以外の生徒の考えや気持ちなどを聞く場面を設けていくことが、生徒の言語活動における他者との関わりへの関心を生み出すことに、有効に働くのではないかと考えた。その結果として、対話活動が充実するとともに、生徒の対話力も高まるのではないだろうか。

(3) 対話力の育成に有効な教材の開発

対話力を育成するための教材開発においては、どのようなことに留意したよいかについて十分な検討をしていく必要がある。学習教材には多種多様なものが考えられるが、その中でも特に、教師が授業において用いるワークシートは生徒にとって最も身近なものであり、指導の意図を大きく反映させることができるものであろう。前述の通り、本校外国語科（英語）ではこれまで生徒の自己表現力を高めることに力を入れて取り組んできた。そのため、言語活動で教師が示す対話例においては、相手からの質問に対する応答に加え、もう1文加えて自分のことをさらに詳しく伝える「プラスワン」を重要視してきた。今研究における対話活動では、これまでの「プラスワン」の指導とともに、生徒に期待したい対話例で示したような、相手の発話内容に対するフィードバック表現や、それに関連した質問をするような例を数多く与えていきたい。また、活動を行なう生徒たちが「共通認識」を持つことができるかは、どのような話題と場면을教師が選択するかにも大きく関わってくるものであり、それに関しても工夫をする必要があろう。

4 研究の諸問題と今後の課題

1 対話における情意的側面の分析

本校共同研究総論において述べられている通り、人と人とがコミュニケーションをする

際、情意的な側面が大きなウェイトを占めることは言うまでもないであろう。外国語を通じた対話においても、他者との相互作用を通して意味の共有ができたという実感、そして自分が肯定され承認されたという実感を生徒に持たせるためには、単なる技能を身に付けさせることに終始してはいけなと考える。今後、他教科との連携を深めながら、生徒が積極的に対話活動に取り組めるような人間関係の構築に関しても研究を深めていきたい。

また、外国語科（英語）における「ともに学ぶよさ」に関しても十分な分析ができていない。これからの授業実践を通して、「ともに学ぶよさ」をどのように生かしていくことができるか考えていきたい。

2 評価計画の検討

「対話力」を評価するにあたって、生徒の学力をどのような視点から評価していったらよいのか、どの観点において評価していくべきなのかを検討する必要がある。「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」と「表現の能力」の両方の項目に関連してくるものであることは想像できるが、その延長線にあるものと安易にとらえてよいものかどうか、今の段階では定義できていない。研究をすすめながら、評価の方法、場面、および全体の計画について検討していきたいと考えている。

【引用・参考文献】

- 文部省（1998）『中学校学習指導要領』解説 外国語編 東京書籍
文部科学省（2003）『英語が使える日本人』育成のための行動計画の策定について
宇都宮大学教育学部附属中学校（1996）第41回公開研究会発表要項
（1998）第43回公開研究会発表要項
（2004）第49回公開研究会発表要項
高橋正夫（2001）『実践的コミュニケーションの指導』大修館書店
鈴木佑治編（1997）『コミュニケーションとしての英語教育論』アルク
松本茂編著（1999）『生徒を変えるコミュニケーション活動』教育出版
多田孝志（2003）『地球時代の言語表現』東洋館出版社
八島智子（2004）『外国語コミュニケーションの情意と動機』関西大学出版部
三浦孝・弘山貞夫・中嶋洋一編著（2004）
『だから英語は教育なんだー心を育てる英語授業のアプローチ』研究社